2008年度春学期レポート

日本ASL協会実施・日本財団助成
聴覚障害者留学事業

第２期奨学生
Master of Social Work, Gallaudet University
精神保健福祉士　高山 亨太

はじめに

留学生活最後の学期である今学期は、インターンシップのためにテキサス州にあるSouthWest Collegiate Institute for the Deaf (SWCID)に滞在していた。さらに、インターンシップ終了後は、Gallaudet Universityの修了式を経験するなどの多くの経験をすることができた。

春学期のスケジュール

春学期は、インターンシップとオンライン上での講義のみであり、平日は、インターンシップ先のスケジュールに合わせて、テキサス州での留学並びにインターシップ生活を経験した。ソーシャルワーク学部からは、週4日計32時間以上のインターンシップが求められていたので、インターンシップ先の指導教員と相談した結果、インターンシップ自体は、月曜日から木曜日までで、特に予約やイベントがない限り、金曜日はオンライン講義の受講日というスケジュールとなった。勤務時間については、インターンシップ先の開設時間に合わせて、8時半から5時半までだった。もちろん、インターンシップなので給料はないが、自分の部屋とパソコンが与えられた。

表１　春学期のスケジュール

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	週末
5a.m.	起床・朝シャワー・朝食・コーヒー					睡眠中
6a.m. 8a.m.	予習・宿題など					
8a.m. 8:30a.m.	出勤				Online Class	
8:30a.m. 12p.m.	インターンシップ					起床
12p.m. 1p.m.	昼食					
1p.m. 5:30p.m.	インターンシップ				Online Class	買い物や付き合いなど、ストレス発散、日曜日は特に宿題など
5:30p.m. 6p.m.	帰宅					
6p.m. 7p.m.	夕食					
7p.m. 12.a.m.	宿題やその他、シャワー					
12a.m. 以降	就寝					

履修クラス

１．応用的実践技術演習（Advanced Practice Seminar）オンライン　3単位

オンライン講義であるAdvanced Practice Seminarは、各々の学生がこれまでの各種クラスやインターンシップで学んだ知識や技術、さらに現在のインターンシップでの経験を元に、毎週出される様々なテーマについて、各自が総括的客観的に議論するという内容である。様々なテーマが各々の学生に与えられ、各自の担当週において、各自の持ちテーマについて、いくつかの理論や質問を出した上で、他のクラスメイトから意見を引き出しながら、議論を深めていくという大変な作業であったが、他のクラスメイトのインターンシップ経験などを共有することができるなど、有意義なオンラインディスカッションであった。学生は、少なくとも1回以上は質問に対して回答や意見を投稿することが求められている。

私の担当テーマは、「アルコール・薬物依存」であり、クラス開始から数えて第3週目の担当だった。教科書などを参考にしながら、自分の知識や経験を元に、具体的なケース事例を考え、理論、援助計画、法律、調査、倫理的問題などについてそれぞれ設問を作成した。問題を出した後、1週間にわたって、クラスメイトからの回答にコメントをつけたり、必要な情報を提供したりした。アルコールや薬物の問題は、近年の日本においても取り上げられるようになってきたが、根本的な解決方法までに至っておらず、また情報提供も遅れているのが現状である。そのような中で、日本のろう社会におけるアルコール・薬物問題に関する情報提供や支援体制のあり方が課題となっている。

このオンライン講義の最終レポートは、ろう・難聴者の社会福祉に関わる１つのケースや状況について、これまで自分が学んできた理論や知識、経験をもとに小論文形式で書くというものであった。自分が選択したテーマは、「日本のろう社会におけるソーシャルワーク実践：アルコール・薬物依存者に対する支援を中心に」であった。留学した目的が、日本のろう社会の状況を変えていくことであり、さらにろう・難聴者に関わるソーシャルワーカーに、どのような知識や技術が求められているのかについて学ぶことであったので、自らの日本での経験や知識をGallaudet Universityで学んだことと織り成しながら、１つのレポートとして、小論文としてまとめた。レポートの中では、日本のソーシャルワーカー養成や任用システムの課題やろうあ者相談員の現状について客観的に触れた。さらに身体障害者福祉法や精神保健福祉法などの日本の社会福祉に関する各種法規の課題点などにも触れながら、今後、どのような支援が必要になるのか分析した。さらに、日本のろう教育におけるスクールソーシャルワーカー制度がまだ設立されていない点についても述べた。

２．応用的ろう・難聴者領域インターンシップ（Advanced Field Practicum with Deaf and Hard of Hearing Populations）現場実習とオンライン　6単位

Advanced Field Practicum with Deaf and Hard of Hearing Populationsでは、すべての学生にインターンシップを求めており、さらにオンラインでのディスカッション参加が求められた。インターンシップに関しては、最低でも1日8時間勤務で、週4日計32時間以上のインターンシップが求められた。さらにインターンシップ先の選択条件としては、利用者の60％以上がろう・難聴者であること、さらに指導者がソーシャルワーク修士号を持ち、さらにソーシャルワーカー資格を有していることが基本条件として求められていた。さらに、毎週のインターンシップ記録を提出する必要があり、さらにプロセスレコード（クライエントとの対話分析）というものを書くことが義務付けられていた。また、週1回は指導者による指導（スーパーヴィジョン）を受けなければならなく、そのための準備も大変なものであった。

インターンシップの評価については、中間評価と最終評価を指導者と共同議論しながら作成し、大学に提出した。インターンシップ開始当初に設定した目標と達成度を照らし合わせながら、実際の自分の取り組みなどを客観的に評価した上で、今後の課題を提示するという指導者との共同作業を通じて、現在の自分の技量を冷静に分析することができたことは大きな経験になった。

インターンシップ（SouthWest Collegiate Institute for the Deaf (SWCID)）

1月11日より、テキサス州ビッグスプリング市（Big Spring）にあるSouthWest Collegiate Institute for the Deaf (SWCID)にて、インターンシップを経験してきた。日本のろう社会では、アメリカにおけるろう・難聴者のための大学、もしくは多くが在籍する大学として、Gallaudet UniversityやNTID/RITやCalifornia State University, Northledgeなどが知られており、また、最近は日本ＡＳＬ協会と協定を締結したOhlone Collegeというコミュニティカレッジが知られる。日本ではまだその名をあまり知られていないが、SWCIDはHoward Collegeというテキサス州のコミュニティカレッジの管理下にある世界で唯一のろう・難聴者のためのコミュニティカレッジとして知られている。SWCIDは、テキサス州によって設置され、運営費もテキサス州から補助金の支給が保障されている。学生は、手話通訳を学ぶ聴者の学生を含めて、約110人ほどのろう・難聴学生が在籍しており、約50名の教職員の支援を受けながら学んでいる。SWCIDが提供しているプログラムは、日本で言えば歯科技工士養成課程や、コンピューター、ビジネス実務、グラフィクアート、建築、溶接、整備士、ろう教員のアシスタント、手話通訳者養成課程といった職業訓練の課程があり、さらに大学進学を希望する学生のために一般教養の課程もある。一般教養課程は、Haward Collegeの他のキャンパスに行って、手話通訳サービスを受けながらクラスを取得することが可能となっている。

SWCIDの学長はろう者（Howard College全体としては副学長となる）であり、さらに事実的にSWCIDの副学長であるDean自身もろう者である。教授自身も半数以上がろう・難聴者であり、事実的にろう・難聴者のためのコミュニティカレッジであり、NTID/RITのコミュニティカレッジ版だと思えばいいだろう。また、教職員の多くがGallaudet Universityの卒業生である。

インターンシップでは、アルコール・薬物問題に関する専門的支援や個別カウンセリング、キャリアカウンセリングなどの様々な個別支援を経験した。さらに無給の非常勤講師として、ろう・難聴学生を対象に「聴覚障害（英題: Hearing Loss）」と題して講義をした。この講義の目的としては、ろう・難聴学生自身が「ろう者」、「難聴者」、「コミュニケーションモード」、「ろう学校経験の有無」などといった文化的アイデンティティだけではなく、「聴覚障害の種類」、「聴覚障害の程度」、「病因」、「受障時期」、「使用している補聴機器」などといった医学的アイデンティティについて理解することが目的である。

さらに、「精神保健（英題：Mental Health）」という題で、大学生活の成

功や充実のために必要な知識などを学ぶ「カレッジサクセス」というクラスで、精神（Psyche, Mind, Mental）の基本について、さらにストレスマネジメント、精神疾患・障害について、治療やサービスを受けるための方法などについて講義した。「薬物乱用（英題: Substance Abuse）」と題し、大学生に多く見られる薬物使用や乱用の現状について、講義をし、どのような誘因があるのか、その予防方法、治療方法について講義した。最後の授業として、「賢い学習スキルと人間関係（英題：Smart Academic Skills and Relationship Skills）で、多くのろう・難聴学生がつまづく人間関係や学習方法について、どのように克服していったらいいのかいくつかのディスカッションや事例を通じながら、それぞれの学生の気づきを促すことに努めた。インターンシップを通じて、素晴らしい指導者の指導の下に、プロフェッショナルとしてのソーシャルワーカーのあり方について学ぶことができた。さらに、スーパーバイザーのあり方について学ぶことができたこともひとつの収穫である。

American Deafness And Rehabilitation Association (ADARA)

4月15日から19日まで、テキサス州の古都であるサンアントニオ市にて開催されたAmerican Deafness And Rehabilitation Association (ADARA)のカンファレンスに参加してきた。ADARAは、ろう・難聴者の職業リハビリテーションについての研究や提言を行う学術団体として、主に職業リハビリテーションカウンセラーを中心に1961年に第一回のカンファレンスが開催されたことから始まっている。アメリカの中でも歴史のあるろう・難聴者支援の専門職団体であるのと同時に学術団体でもある。旧年までは、職業リハビリテーション領域の関係者が多く、当然職業リハビリテーション荷関する議論が中心であったが、時代の流れもあり、現在はメンタルヘルスや薬物問題などの議論が多くなっている。会員構成もソーシャルワーカーを中心に、サイコロジストやカウンセラー、手話通訳者などとろう・難聴者支援に関わる様々な専門職が集っていた。ADARAは、カンファレンス開催だけではなく、学術団体として学会誌も発行していることで知られている。

今年度のカンファレンス参加者は250人ほどであった。ワークショップは、5日間の日程で、合計44もののワークショップやプレゼンテーションがあり、主にメンタルヘルス領域に関するプレゼンテーションを中心に参加した。1日目の夜は、ポスターセッションとして時間が割り当てられており、日本での専門学会のようにポスターセッションが行われた。クラスメイトと私の二人で、共同でポスター発表を経験した。ポスター発表のタイトルは、「Pilot Project in Alcohol Education: Cultural and Linguistic Intervention」である。内容は、秋学期に履修した自由研究「薬物乱用に関する教育：言語的文化的介入 （Independent Study-Substance Abuse Education: Linguistic and Cultural Intervention）」の研究・実践成果の発表である。具体的には、アルコール問題に関するアメリカ人ろう・難聴当事者へのオンライン啓発教材の開発と日本のろう・難聴者に関わる社会福祉専門職を対象にしたオンライン教材の開発についての実践報告である。

HoodingとCommencement

インターンシップが終了した後の5月14日には、待ちに待った大学院生のためのHoodingが、15日には、全体の卒業式が行われ、アメリカでの卒業式では一般的な習慣となっているガウンを着て参加してきた。日本でいくつも卒業式を経験してきたが、卒業式の中でガウンを着るという経験がなく、地味で厳格な日本流の卒業式しか経験していないため、自分にとっては新しいスタイルの卒業式だった。Hoodingでは、ソーシャルワーク学部のDr. Teresa Mason学部長に「Kota Takayama」と自分の名前を呼ばれてから、舞台の上で伝統的なHood（首にかける修士号や博士号取得者の証拠である）を後ろから首にかけてもらった時点で、ソーシャルワーク修士号の取得者になったのだと感じた。2日目の15日は、学部生も含めて、全体の卒業・修了式が執り行われ、ガウン姿に前日のHoodingで授与されたHoodとキャップをかぶって、晴れがましい気持ちで修了式に参加した。修了式では、ソーシャルワーク学部と大学院の修了生であるWilma氏が記念講演をし、さらに名誉博士号を授与された。 Wilma氏は、南アフリカ出身であり、さらに南アフリカでろう者として初めて国会議員に当選し、さらに３選目国会議員として現在も精力的に活動中である。彼女自身、ソーシャルワーカーとして長年にわたって南アフリカやその他の近隣アフリカ諸国のろう・難聴者のために活動されている。さらに、2年後に南アフリカで開催される世界ろう者大会の大会長でもある。学長のスピーチ、Wilma氏による記念講演、各々の名誉博士号授与が終了した後に、卒業・修了生への卒業証書授与がなされ、自分は大学院生の中でも名字のアルファベット順で並んで最後から2番目（ソーシャルワークのクラスメイトとしては最後）に学長から卒業証書を授与された。舞台に上がり、学長と拍手をしたときには感動し、また愛する家族や支援してくださった野崎さんを始め日本ASL協会や日本財団の職員、日米両国の友人、クラスメイト、ソーシャルワーク学部の教授、母校の教授など多くの人への感謝でいっぱいである。私は今年で最後となるDr. Robert Davila学長によって修了式を迎えることができたことを誇りに思っている。さらに、自分の卒業証書には学長だけではなく、現アメリカ合衆国大統領であるObama大統領のサインが添えられるので、卒業証書は一生の宝物となるだろう。

日本へ帰国

卒業式の翌日に、母親と叔父とともにニューヨークに移動し、ニューヨーク観光とニューヨークヤンキースの野球試合を楽しんできた。修了式に、父親が来られなかったのは、残念なことであるが、修了式やニューヨークでの観光などを通じて、これまで支援してくれた母親と叔父への自分なりの精一杯の恩返しができた気がする。

5月19日付けで、無事に日本に帰国することができ、アメリカの留学が終わったのだなと嬉しさを感じる一方で、寂しさを感じた。

今後とまとめ

今後は、母校に復学し、博士論文完成を目指すとともに、東京都のろうあ児施設である金町学園でソーシャルワーカーとして、さらに大学や専門学校での非常勤講師などの仕事をしながら、日本のろう・難聴者のためのカウンセリング実践を含めたソーシャルワーク実践の質の向上に向けて留学の成果を還元しながら様々な事に取り組んでいきたいと考えています。今まで、応援してくださり、ありがとうございました。